

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32643

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770116

研究課題名(和文)P・B・シェリーの感性の詩学と19世紀唯美主義の源流、1815～1875年

研究課題名(英文)P. B. Shelley's Poetics of Sensibility and the Beginnings of Nineteenth Century Aestheticism, 1815-1875

研究代表者

木谷 巖(Kitani, Itsuki)

帝京大学・教育学部・准教授

研究者番号：30639571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀のイギリス・ロマン派詩人P・B・シェリーに見られる心身の感性的な美をめぐる詩学を、19世紀後半にウォルター・ペイターらによって確立された唯美主義の源流の一つと仮定し、シェリーの詩群を精読した。1815-75年と期間を限定したなかで、シェリーの詩学から19世紀英国唯美主義に至る系譜(類似性や差異)を探り、これに21世紀以降の文学理論・批評理論において再注目されている「美感的なもの」や「形式」の概念と関連させ、シェリーの感性の詩学に潜む唯美主義的な側面に新たな光を当てることを目指した。

研究成果の概要(英文)：This project attempted to pursue how the 19th century British Romantic poet P. B. Shelley emphasized the importance of sensibility in both physical and psychological senses. Regarding this as one of the beginnings of the aesthetic movement established by Walter Pater and other artists in the late nineteenth century Britain, I applied the method of close reading to Shelley's poems. Focusing on the period ranging from 1815 to 1875, my project aimed to reveal some kind of genealogy from Shelley's poetics to nineteenth century British aestheticism. In addition to this, my project also related such ideas 'the aesthetic' and 'form' as have been reevaluated in today's literary theory to Shelley's poetics of sensibility. With this I shed new light on some aesthetic aspects hidden in Shelley's poetry.

研究分野：英文学

キーワード：英語圏文学 ロマン主義 P・B・シェリー 感受性 唯美主義 詩 形式

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、2011年英国ダラム大学に提出した博士論文 *The Pleasure of the Senses: The Art of Sensation in Shelley's Poetics of Sensibility* を含むこれまでの研究において、国内外の先行研究であまり顧みられてこなかったロマン派詩人 P・S・シェリーの詩における審美性と身体感覚の関係を考察した。その過程において、18世紀道徳哲学 (moral philosophy) における美的趣味 (aesthetic taste) にもとづく感受性 (sensibility) の概念、および 18世紀自然哲学 (natural philosophy) における身体的感受性・感覚性 (sensitivity, sensibility) の概念の探求という二種類の「感受性」概念の交差する領域、すなわち現在「感受性の時代 (the age of sensibility)」と呼ばれる時代区分 (18世紀後半) がシェリーの詩作にどれほどの影響を及ぼしているかについて考察してきた。

具体的な方法としては、シェリーの個別の詩を取り上げ、同年代の私信や評論と比較検討を加えることで、シェリーの詩に用いられている「五感」をめぐるさまざまなモチーフ、さらに個々の比喩のイメージが、当時の思想史、文化史を反映するものであるとして、各章において独自の仮説を立てた。それについて、詩の精読・形式的読解 (close reading) をそして関連する資料調査に基づいた精査・実証してゆくことを通じて、シェリーの「感性の詩学」を浮かび上がらせることを試みてきた。その一部は学術論文および国際学会での研究発表を通じてすでに発信されている。

このように、伝統的に「抽象的・観念的」であり、実体に乏しいとされてきたシェリーの詩が、いかに五感に訴えかける感性的なイメージをその源泉および推進力としていたかについて調査を行った。これをもとに、「感受性の時代」の影響をもとに培われていったシェリーの「感性の詩学」が、心身の感性を通じて超感性的な理想美 (純粋な美そのもの) を果てなく追求する詩人にとって詩的創造の根本原理であったという説を確立することを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究では、19世紀のロマン派詩人 P・B・シェリーによる「心身の感性の重視」という点を、21世紀以降再注目されている「美的 = 感性的なもの」や「形式」の概念と関連させ、さらに追求しようと試みた。具体的には、まずシェリーの感性的な美の詩学を、19世紀後半にウォルター・ペイターらによって確立された唯美主義の源流の一つと仮定し、1815-75年と期間を限定してシェリーの詩群を精読することで、その詩学から 19世紀唯美主義に至る系譜 (類似性や差異) を探った。さらに、「美的 = 感性的なもの (美感的なもの)」や「形式」をめぐる最新の批評動向をシェリー研究に導入することで、唯美主義者の新たな一面を提示すること

を目指した。

## 3. 研究の方法

本研究方法は、主に次の四点から構成された。

(1) シェリーを源流とした 19世紀唯美主義の新たな系譜図 (1815-1875年) を構築する。

(2) (1) の系譜図に現在の「美的なもの」や「形式」をめぐる批評的動向をシェリー研究に導入し、新たな問題を提起する。

(3) (2) をもとに、申請者がこれまで独自に探究したシェリーの「感性の詩学」を「シェリーの唯美主義」という問題設定に組み込み、シェリー研究における美学的側面で新たな成果を提示する。

(4) 本研究計画後に行う予定のシェリーと「新ロマン主義」や「感受性の乖離」といった概念の関連についての研究を進めるための基盤の確立する。

## 4. 研究成果

研究初年度 (平成 25 年度) は、おもに以下の点に関して成果が得られた。

(1) イギリス・ロマン派詩人シェリーの感性の詩学を「美的 = 感性的なもの」 (the aesthetic) という観点から再び整理することを本計画の出発点とした。超感性的な理想美 (純粋な美そのもの) への憧憬という詩的特徴のために、概して抽象的・観念的で実体に乏しいとされてきたシェリーの詩が、実際には五感に訴えかける感性的なイメージを詩想的源泉および詩作的推進力としていたという説を、一次資料の精読を通じて示すことを試みた。そこで、シェリーの詩的創造における根本原理としての「感性の詩学」を措定し、このなかに、到達不可能な超感性的美に接近するために心身の感 (受) 性を極限まで駆使し苦闘しながらも、その苦境的な経験すら享受してしまうという意味において、詩作という創造 = 想像行為にともなう快楽の過剰 (享楽) をめぐる感性のダイナミズムを見出した。これをもとに、恋愛詩『エピサイキディオン』 (*Epispychidion*, 1821) におけるいくつかの詩的モチーフの連関について学会で発表し、詩の新解釈を提示した。

(2) 同時に、シェリーの詩学との接点を持つ 19世紀の唯美主義に関する一次・二次資料の調査に努めた結果、いくつか興味深い事象にも突き当たった。そこで、これらの発見の一部にもとづくテーマで研究発表をある国際学会 (次年度開催予定) に申請した結果、受理された。

(3) (2) と並行して、現代における「美的 = 感性的なもの」をめぐる最新の研究動向を知るために先行研究等の文献調査をおこなった。とくに、かつて文学批評家ポール・ド・マンが提示し、現在も批評的関心を集めてい

る「美学イデオロギー」(aesthetic ideology)の問題系を中心に文献を収集し、整理した。次年度には、この調査結果の一部を踏まえた論考を収録した書籍(共著)が出版される見込みとなった。

本研究の2年目にあたる平成26年度は、前年度から整理を進めてきたP・B・シェリーの「感性の詩学」に関する研究をもとに、継続的かつ発展的な研究調査をおこなった。これを研究計画書に記載された実施計画・方法にもとづいて振り返ると、下記の通りとなる。

(1)シェリーの「感性の詩学」を体系的に整理するために、一次資料および関連する二次資料の精査を進めた。また、その一環として、ナポレオン戦争時代における風刺画の特別展(ロンドンの大英博物館にて2015年に開催)を訪れ、シェリーの政治批評との思想的関連について調査をおこなった。

(2)シェリーの「感性の詩学」という創作姿勢が、19世紀後半の英国における「唯美主義」的な詩人や芸術家にどのような影響を与えたかという点について研究を進めた。その際、考察対象となる「唯美主義」という概念を明確に定義するために、実際この時代に「唯美主義」について論じていたウォルター・ペイターの一次資料を精読し、本研究にとって必須となるテキストを選別した。また、本研究と類似性を持つ他の研究者の著作・論文を収集し、読み込んだ。

(3)上記の「唯美主義」運動と不可分とされ、現在「ラファエル前派」と呼ばれている芸術家グループの代表的詩人画家D・G・ロセッティにも着目し、その一次資料の精読を進めた。その際、詩の「形式」(form)や「美感的なもの(美的=感性的なもの)」(the aesthetic)という側面にも注意を払った。また、これに関連して、現在の「文学理論」における美感的なものをめぐるイデオロギー、いわゆる「美学イデオロギー」(ポール・ド・マン)の問題系についても引き続き注意を払い、関連文献の調査と読解を進めた。

(4)前年度までの研究調査をまとめ、シェリーの「感性の詩学」について国内外の学会で研究発表をおこない、また、シェリーの詩学と美学イデオロギー、および文学研究における「よろこび」(pleasure)の概念とを結びつけた論考の活字化をおこなった。

平成27年度においても、イギリス・ロマン派詩人P・B・シェリーの「感性の詩学」の研究を基礎とし、シェリーの詩作態度が19世紀後半の英国における「唯美主義」的な詩人や芸術家に与えた影響について調査を進めた。なかでも、のちの「唯美主義」に連なる「ラファエル前派」の芸術家たち、とりわけ「詩の肉体派」(The fleshly school of poetry)とも形容されたD・G・ロセッティの絵画詩や散文と、シェリーによる感性の詩学の具体的な接点を探った。

両者のつながりの特徴づける調査過程に

おいて、別の比較対象としてシェリーの同時代詩人ジョン・キーツと、その詩作品を絵画のテーマとしてたびたび採用しているラファエル前派との関係も整理した。ラファエル前派とキーツの関係を対比的に並置することによって、ロセッティとシェリーの共通点を前景化することを目指した。この研究は、27年度中に具体的な成果をまとめて発表するまでには至らなかったものの、副次的な成果として、「美感的なもの」をめぐるキーツの詩的特質について「イギリス・ロマン派講座」(イギリス・ロマン派学会主催)で発表する機会が得られた。

その他には、昨年同様、ロマン主義者シェリーと「美感的なもの」(the aesthetic)の関係を現代の「文学理論」の文脈において整理する作業も進めた。とくに、批評家ポール・ド・マンが「美学イデオロギー」として考察した、ロマン主義における美の諸相をめぐる問題についても文献調査を続けた。これに関連して、大阪大学の小口一郎准教授の協力を得て、美学イデオロギーを分析するうえで不可欠となる「(おもに英独仏の)ロマン主義における主体の問題」をド・マンがどう説明したかについて発表し、大阪大学の研究者たちと意見交換をする機会を得ることができた。

最終年度においては、シェリーの「観念的エロス」に着目し、この概念を支える精神的または身体感覚的な「距離感」のダイナミズムを考察した。その例として、晩年のシェリーによる一連の恋愛詩篇、通称「ジェイン詩篇」を取り上げた。この詩篇の中では、シェリーとジェインの心理的な距離と身体的な距離が絶妙に絡み合っており、その距離感が多彩な比喻を用いて描かれている。そこで登場する遥かなものやうつろいゆくもののイメージは、いずれも天上の愛(聖愛)と地上の愛(俗愛)のあいだに存在するものとして描かれる。その枠組みにおいて生み出される精神的または身体感覚的な距離感のダイナミズムは、天上のヴィーナスという美の形象を通じて可視化されている。ジェイン詩篇を端緒として晩年のシェリーの抒情性を新たに捉えなおし、同じく天上のヴィーナスとしての美の形象が、後世の詩人たち、たとえばE・A・ポーやD・G・ロセッティの審美的な詩のイメージへとつながる系譜を生み出していることを明らかにしようと試みたものの、年度内の論文化には間に合わなかった。

最後に、これまでの研究成果を踏まえた今後の研究の展望を概観したい。シェリーを源流とした19世紀(1815年-1875年)の唯美主義の伝統とその系譜を探究する試みは、シェリーの「感性の詩学」の理解をさらに深めるものであると同時に、申請者が将来の課題としている大きな二点を露わにするとと思われる。

一点目であるが、本研究は、ヴィクトリア朝後期にみられるようになった「新ロマン主

義」(Neo Romanticism)と呼ばれる芸術運動(W・B・イエイツやトマス・ハーディ、A・E・ハウスマンなど)との関わりを考察する際にも大きな一助となることと予想される。

二点目の大きな課題は、20世紀モダニズムの詩人・批評家 T・S・エリオットの提示した「感性の乖離」(the dissociation of sensibility)である。これは、17世紀を境に、イギリスの詩人たちが自由に駆使していた「感じるように思考し、思考するように感じる」という、いわば分かちがたく結びついていた思考と感情の繋がりが乖離してしまったという議論である。エリオットは、この乖離を再統合しようと奮闘した詩人にシェリーを挙げている。申請者は、この「感性の乖離」といういまだに論点を多く残す概念について将来的にさらなる考察・追求を進めることを目標としている。そのためにも、シェリーの「感性の詩学」とともにその唯美主義を探究する本研究は申請者にとって欠かせないものとなる。本研究を遂行することで、シェリーの感性の詩学から唯美主義を経て、エリオットの「感受性の乖離」へとつながる研究の基盤が確立できると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

木谷 巖 「「裂け目」の彼方へ—E・M・フォースターの『モーリス』に見るセクシュアリティの詩学』『帝京大学教育学部紀要』40号、2015年、pp.13-27(査読有)

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 木谷 巖 「聖愛と俗愛のあわい—シェリーのジェイン詩篇にみる距離とうつろい」、第9回英詩研究会、法政大学市ヶ谷キャンパス、ボアソナードタワー25階B会議室(東京都千代田区)、2016年9月11日(審査なし、招待有)
2. 木谷 巖 「Keats: “Ode to a Nightingale” 心音を聴くように」第34回(2015年)イギリス・ロマン派講座(イギリスロマン派学会主催)早稲田大学早稲田キャンパス16号館107教室(東京都新宿区)、2015年6月20日(審査なし招待有)
3. 木谷 巖 「過ぎゆくもののアイロニーと美感的な体験—『オジマンディアス』再読を中心に」、シンポジウム「21世紀のロマン派研究と精読の可能性—『距離』をめぐるいくつかのアプローチ」、イギリス・ロマン派学会第40回全国大会、茨城大学水戸キャンパス(茨城県水戸市)、2014年10月19日(審査有、招待有)
4. Itsuki KITANI, “If You Choose to Dip

Your Oar into Sentiment’s Stream”: A Sense of Evanescence in Shelley’s ‘Sky-Lark’ and Natsume Sōseki’s Aesthetic Ideas’, *Romantic Connections’: A Supernumerary Conference of the North American Society for the Study of Romanticism (NASSR)*, University of Tokyo, Hongō Campus, Tokyo, Japan, 14th, June, 2014(審査有).

5. 木谷 巖 「ヴィーナス、芳香、飛翔—シェリーの『エピサイキディオン』と形式および形象にまつわるいくつかのモチーフについて」、イギリス・ロマン派学会第39回全国大会、安田女子大学安田キャンパス(広島県広島市)、2013年10月(審査有)

〔図書〕(計 1 件)

1. 木谷 巖 他、『文学理論をひらく』、東京: 北樹出版、2014年。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者  
木谷 巖 (KITANI, Itsuki)  
帝京大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 30639571

(2)研究分担者  
( )  
研究者番号:

(3)連携研究者

研究者番号 ( )

(4)研究協力者 ( )